

## 第3章

# 相生・相克・相乗・相侮症例の検討

本章では筆者の経験した症例から、相生・相克・相乗・相侮を考える。なお、以後、記載する煎薬は、大塚敬節・矢数道明監修『経験漢方処方分量集』（医道の日本社）<sup>1)</sup>に拠った。また五行図の番号は肝①、心②、脾③、肺④、腎⑤とし、各臓の弁証ごとに肝①-1、肝①-2……（心・脾・肺・腎についても同じ）と表記した。

## 3-1 心脾同病

現代医学的にも心臓と胃腸の臓器相関は観察される。たとえば、心不全患者では胃粘膜に変化が起これると報告されているし、一般に心臓病患者が狭心発作前に、食欲不振を来したり、下痢を来したりすることはときおり経験する。また心不全になると食欲不振が悪化する。このように、心臓と胃腸の臨床症状の相関はよく認められるところである。

### 症例 1

【要旨】 補心薬の減量で出現した胃症状が、補心薬の服用量を元の量に戻すことによって消失。

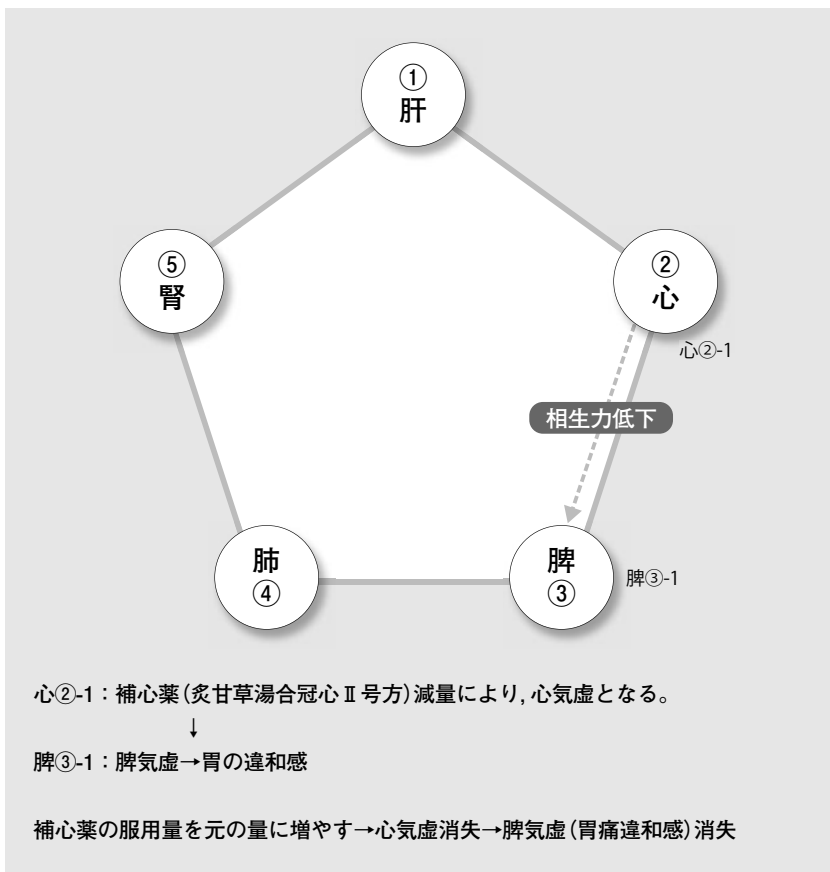
【患者】 81歳、女性、小柄でやや痩せ型。

【初診】 X年9月18日

【主訴】 胃の鈍痛を伴う違和感。

【現病歴】 胃痛や胃違和感に柴胡桂枝湯加減方（柴胡桂枝湯 4.5g + 茴香・ボレイ末等量混合物 1.5g / 日：以下、柴桂）服用にて現在は無症状である。一方、虚血性心疾患に心臓用薬（炙甘草湯合冠心Ⅱ号方：炙甘草湯 + 川芎

### 3-1 心脾同病 症例1 81歳女性



4g, 赤芍4g, 紅花3g, 降香3g, 丹参5g。2日分を3日で食後に服用)を服用していると調子が良いということから, 数年来服用を継続している。きわめて心臓の状態が良いので, 炙甘草湯合冠心Ⅱ号方の服用のみを3分の1量に減らしたところ, その1カ月後から, 柴桂の服用量は同じであるのに, 胃の違和感が出始め, 漸次悪化し約4カ月後に胃症状に対する処方を求めてきた。柴桂を倍量とし, 加味平胃散・半夏瀉心湯を加えて20日間投与したがまったく無効であった。

**【既往歴】** 3年前に狭心症で西洋薬を服用していたが, 胃症状があり中止。

ときおり神経性胃痛がある。26歳時に卵巣囊腫を摘出。

【家族歴】 父：93歳で老衰死。母：88歳で脳出血死。

【舌所見】 舌質淡紅，中央部に剝離亀裂がある。

【脈所見】 左浮滑，右沈細，脈拍 72/分，血圧 112/68mmHg。

### 【症候分析】

- 胃痛および胃違和感——補心薬の減量による心気虚（心②-1）→心脾相生力の減少→脾気虚（脾③-1）

【弁証】 心不生脾（心臓病薬の減量によって心から脾への相生力が低下）

【治法】 補心生脾（補心を強化）

【処方】 炙甘草湯合冠心Ⅱ号方を元の量に増量（以前から服用していた柴胡桂枝湯加減方は量を変更せず続服）

【経過】 服用開始3日後に患者から電話があり、「先生，長い間続いた胃の症状がほとんど消えました。……なぜ，心臓の薬で胃が良くなるのですか？」と聞かれた。

### 【考察】

無症状のため心臓病薬の服用量を減らしたが，心臓の症状が出なくても心脾相生力の低下を招き，胃症状が出現したと考えられる。治療に抵抗する胃症状に，特に心臓症状を訴えていなくても補心薬を補強することが，胃腸症状改善のための選択肢である可能性を認識しておかねばならない。

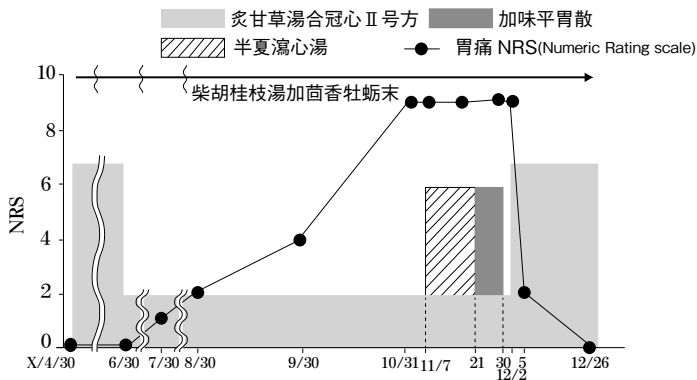


図 3-1 症例 1 女性 81 歳

## 症例 2

【要旨】 補脾薬でとれない腹部膨満感が、脈沈弱・走るのを嫌うことから心気虚と弁証し、補心薬追加で改善した。

【患者】 37歳，女性，162cm，56kg。

【初診】 X年10月20日

【主訴】 腹部膨満感，情緒不安定，易怒。

【現病歴】 X-1年から管理職になり，ストレスを感じるが増えた。いらつく・不機嫌・時に職場で怒り出したら止まらない。顔面発赤・頭のぼせ感・月経時に頭痛がある。便は気張っても出ないためウォッシュレットを使って出している。ゲップ・ガスが出にくく，ときおり腹部膨満感が悪化し腰も曲げられない感じで，下剤を多用して解消。寝付きはよく熟睡している。倦怠感があるときは悪夢を見る。運動しないと肩が凝る。寒がりでも夏でもクーラーを使わない。月経は規則的にくる。ストレスで排卵出血がある。1，2カ月前からストレスが増え，爪が割れだした。走ることが嫌いで，走らないと間に合わないような電車には乗らない。

【既往歴】 18歳でEBウイルス感染症。肝炎。円形脱毛症数回。以前，しもやけが当帰四逆加呉茱萸生薑湯で治癒。15年前に仕事を始めて胃痛・背部痛が始まった。5年前からストレスで下痢が始まった。同時に気張っても便が出にくくなった。ストレスで泥状便，ガスが溜まるが，これには以前，柴胡加竜骨牡蛎湯が奏効した。

【家族歴】 父：糖尿病，82歳時に咽頭・肺がんで死去。母：副甲状腺腫瘍・子宮筋腫。

【生活歴】 20歳から煙草を吸う。12歳で初潮。

【舌所見】 舌質淡紅，舌苔薄白。

【脈所見】 沈弱，血圧98/58mmHg。

### 【症候分析】

- いらつく・不機嫌・職場で怒り出したら止まらない・顔面発赤・頭のぼせ感——肝鬱火化・肝気上逆（肝①-2）
- 便・ガス・ゲップが出にくい・ストレスで泥状便——肝旺乘脾（肝脾不和）（肝①-1）

- ストレスで爪が割れる——肝血虚（肝①-4）
- 円形脱毛症——肝鬱血瘀・髪失血養（肝①-3）
- 寒がり・しもやけ・夏でもクーラーを使わない・足腰の冷感——腎陽虚（腎⑤-1）
- 疾走するのが嫌いで、走らないと間に合わないような電車には乗らない・脈沈弱——心気虚（心②-1）
- 腹部膨満感——心気虚→脾気虚（脾③-1）

**【弁証】** 肝脾不和・肝鬱化火・肝気上逆

**【治法】** 疏肝理気・和胃除痞

**【処方】**

- 処方①：抑肝散加陳皮半夏 4.5g/日（ツムラ）＋半夏瀉心湯 4g/日（クラシエ）
- 処方②：処方①＋炙甘草湯 6g（ツムラ）

**【経過】**

- X年10月20日：処方①を処方。諸症状の改善は不完全で、X＋1年2月6日まで継続するも効果は不明。
- X＋1年2月7日：下痢以外、不完全寛解のため冷えを考慮して、処方①＋附子理中湯を開始。20日分投与。2月27日まで服用するも無効。
- X＋1年2月28日：附子理中湯が無効なため、胃腸の冷えが腹部膨満感の原因ではない。脈沈弱・走るのが嫌いなどから心気虚があると考えた。

**【弁証】** 心不生脾

**【治法】** 補心生脾（補母益子）

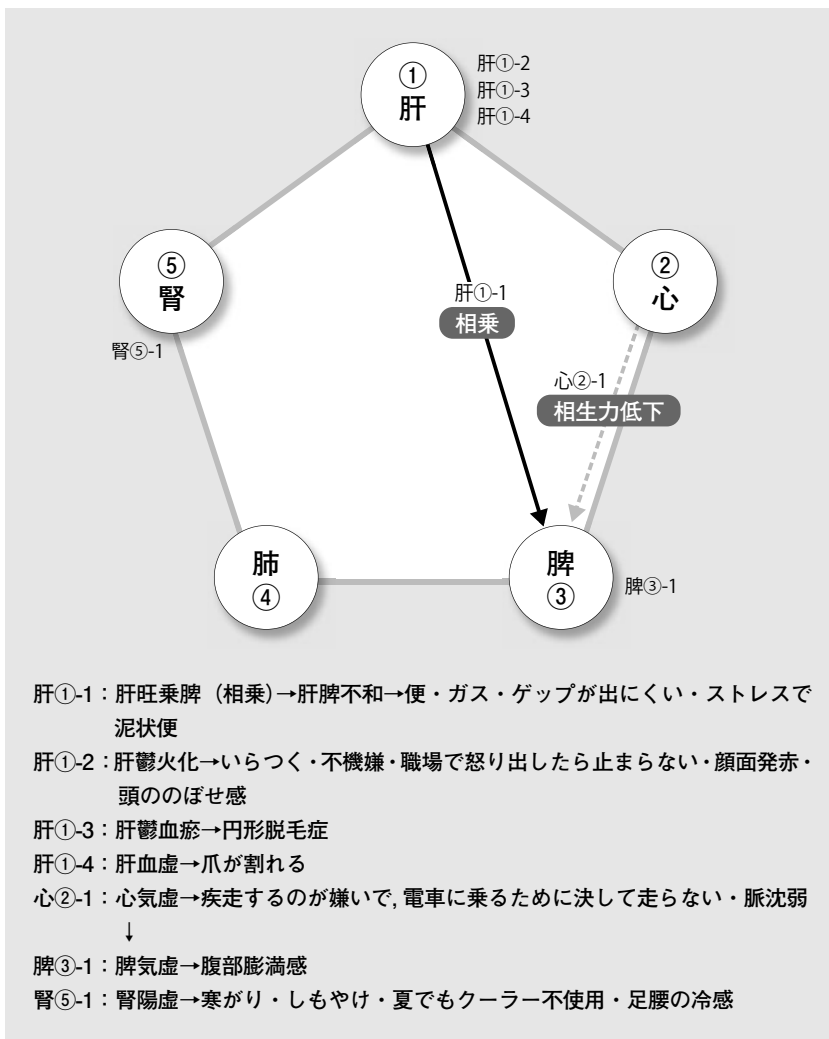
**【処方】** 処方②（抑肝散加陳皮半夏＋半夏瀉心湯＋炙甘草湯）

**【経過】** 処方②を開始し、X＋1年4月4日、これまで残存していたすべての症状が消失した。いらつき・易怒もNRS（Numeric Rating Scale）10→2に改善。以後、同処方を継続して順調である（NRS1～2）。

**【考察】**

抑肝散加陳皮半夏の疏肝・理気・和胃の作用で、易怒・いらつきなどは比較的改善したが、腹部膨満感・胃もたれ・ゲップ・ガスはほとんど改善しなかった。一連の消化器症状は「木乗土」（肝旺乗脾・肝脾不和）によ

### 3-1 心脾同病 症例 2 37 歳女性



るものではないようである。附子理中湯で脾腎を温めても不変であったため、脾陽虚によるものでもない。ところが、炙甘草湯 14 日分を併用したところ、残存した胃腸症状がすみやかに消失した。これは、心から脾への相生力不足が炙甘草湯の投与によって「補心気→補脾気」され改善したも